

研究結果報告書

朝鮮半島刊行の日本伝統詩歌と朝鮮伝統詩歌の日本語翻訳の比較研究： 1920～30年代日韓伝統文化の出会いと越境

所属：高麗大学校 日本研究センター

役職：助教授

氏名：巖 仁卿

本研究は、1920年代から30年代にかけて朝鮮の伝統詩歌を日本語に翻訳し知らせようとした試みを考察すると共に、朝鮮半島で刊行された日本伝統詩歌の作品集を調査、分析することで当時の日本語の文芸雑誌に描かれた、朝鮮伝統文芸の意味とその文化的な出会いを読み解くものである。

朝鮮半島で1923年創刊された『真人』という短歌雑誌が、昭和時代に入ると朝鮮民謡に関わる特別企画を出し続けたが、それらの企画を調査したところ、今まで学界では殆んど取り上げられなかった浅川伯教という人物の文学的な営みを発見した。朝鮮陶磁器の神様と言われた彼は、陶磁器と窯の跡の实地調査研究の傍ら、1924年から1940年に至るまで朝鮮半島で刊行された数多くの日本伝統詩歌(短歌や川柳など)の雑誌や文学単行本(歌集や小説など)の装丁を担当していたことが確認された。このような浅川伯教の多量の装丁作業と装丁に使われた朝鮮伝統工芸(主に白磁の壺と膳)の絵画を発見し、その意味を考察したのは本研究が初めてと言えよう。

また、当時のエリート在朝日本人たちによる文芸雑誌であった『京城雑筆』に、1920年代から1930年代にかけて収録された浅川伯教の自作短歌と随筆を発掘し、その中に描かれた朝鮮の伝統文芸に対する彼の愛好とその美的感覚の特徴を探った。特に彼の短歌には朝鮮白磁への愛着のみならず、朝鮮の土となった日本人として有名な彼の愛弟浅川巧との朝鮮生活も生々しく表現されていて興味深いところである。

このように本研究では、浅川伯教と彼の文学的な記録を中心として、『真人』の歌人たちや『京城雑筆』の文筆家たちとの交遊の有り様を浮彫にした。これらを通し、当時朝鮮の伝統文化固有の特色を具象化しようとした浅川伯教とその共鳴者たちをめぐる一群の在朝日本人の文化圏を確認することで、当時の朝鮮における日本伝統詩歌の形、役割を考察した。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

浅川伯教と朝鮮半島における短歌文壇——雑誌『京城雑筆』、『真人』との関連を通して——(巖仁卿、『日本学報』第107輯、2016年5月)

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)